



# 九条はらまち

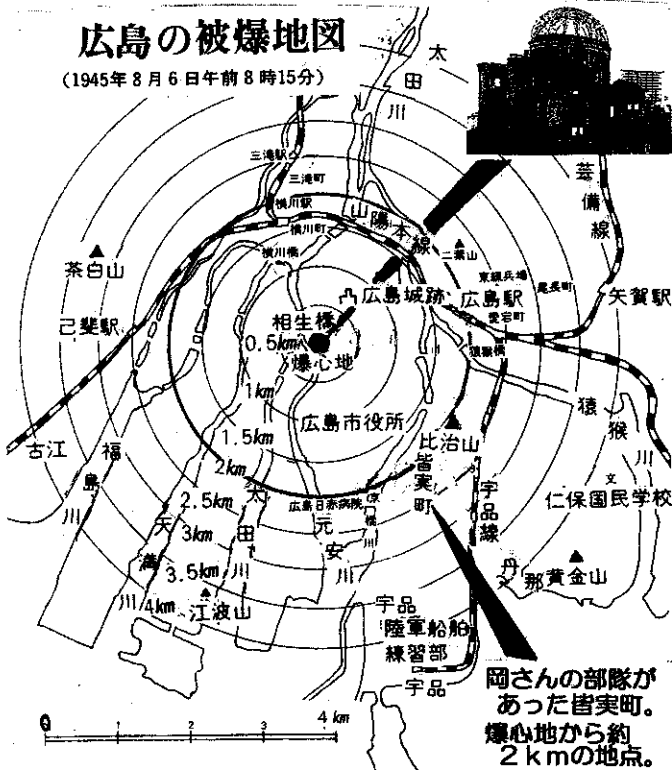
「はらまち九条の会」会報 No. 140  
2010(平成22)年7月16日(金)発行



＜終戦の年の1945年のこの日、アメリカが人類史上初の原子爆弾の実験に成功＞  
●アメリカは1942年夏から原子爆弾製造計画の「マンハッタン計画」を極秘裏に開始。そして1945年7月に3個の原爆が完成。7月16日早朝の5時30分、アメリカ西部のニューメキシコ州アラモゴール砂漠で実験に成功する。＜左写真＞●米国政府と軍部は「日本軍国主義にとどめを刺し、連合国側、特にアメリカ青年の犠牲を極力少なくする」を口実に、ソ連への牽制のため、西日本最大の軍事都市広島に8月6日、原爆を投下する。●当初の原爆投下候補都市は、1小倉、2広島、3新潟、4京都。特に京都は7月まで有力な目標都市でした。

## 広島市の被爆地図

(1945年8月6日午前8時15分)



岡さんの部隊があった皆実町。爆心地から約2kmの地点。

私は大正一五年二月、南相馬市鹿島区に生まれ、今年八五歳です。一九歳の時、広島に軍部で被爆しました。昭和一八年に軍需省に入り、大阪の近畿管理部長で約半年間つとめました。その後、昭和二〇年四月二四日ごろ、広島の船舶通信補充部隊第一六七一〇部隊に現役召集され入隊しました。部隊は広島市の比治山の南の皆実町というところにあつて、爆心地から約二キロメートルの地点です。大変大きな部隊で、全部で二千八百人の兵隊がいました。



### 十九歳、広島に軍部で被爆 「兵隊さん、水をください」

南相馬市鹿島区大内 岡 実

戦後に分かったことですが、新地町の飯土井鶴吉さん(故人)も同じ部隊にいて、悲惨な被爆体験をしています。四月に入隊し、私は二等兵でしたが通信の幹部候補生で、毎日モルルス信号の訓練に励んでいました。五月ごろからその部隊のなかの「カ隊」というところに入りました。

### 八月六日、原爆投下の時

#### 兵舎で仮眠していたが

八月六日の原爆投下の日、いつものように五時の起床、朝食は七時でした。ところが、毎日防空壕掘りの作業でみんな疲れきっていたので、私たちの部隊は午前中就寝休暇となり、各自宿舎で自由に眠るなり休んでよいことになっていました。宿舎は二階建てで一部屋に七五人ぐらゐりました。ベットは狭く、幅は五〇センチぐらいしかありません。本日は二段ベットが入っていますが、その間にも一段ベットとよんでいました。つまり兵隊を二倍収容できるわけです。とにかく私はその時、その二階の北の窓から二番目のベットで眠っていました。一瞬にして兵舎は破壊された。午前八時一〇分過ぎだったのか、時々は気がつきません。飛行機が飛んできたのがうっすらうっすら分かってきたよ。空襲警報は鳴らなかつたのか、だれも避難はしていません。(裏面につづく)



(表のページより)

ピカッと朝の太陽の光とはまた別に、それ以上の明るい、黄色っぽいような光を感じました。と同時にドーンという大きな音がして、音とともに一瞬にして兵舎は破壊されました。

**ベットの間に落ちて助かる**

棟が落ちてきて瓦がガラガラと崩れてきました。私はベットの「二段ギンウ」の下にちょうどうまくくぐってしまい、それで助かりました。胸が圧迫されて苦しかったことを覚えていいます。瓦と同時に壁土も落ちてきて、もう土けむりでも見えます。枕元にきちんと置いたはずの服も靴も帽子も見当たりません。下着のままはだしで外に出てみると、町のあちこちから火事が発生していました。

**大きな「きのこ雲」を見上げた**

比治山の上の防空壕の前に集まり、茫然として山のところに背をもたれ空を見上げていました。するとそこにモクモクと黒い大きな雲ができて、ど



原爆投下5分後の広島

それが「きのこ雲」でした。そのうち、「元気な者は出てこい」と言われ、靴と服をもらって内務班にもどり、部隊内のけが人の収容にあたりました。私と同室での即死者は、茨城県の山田という一人だけでした。

**死んだ人の体に初めてふれた**

**“死体”って随分重いもんだ**

けが人の収容作業ではいろいろな負傷者に出会いました。整列していた兵士はみな同じ方向の顔の半面だけがひどい火傷をして将棋倒しになっていた。帽子の下の外に出ているところだけが火傷をしていない人、脳みそが白いもんだなど初めて分かった。また、生まれて初めて死んだ人の体にもふれて運んだり。死体はドンコロと全く同じで、硬く伸びたままで随分重いもんだなあと感じたり。一九歳でしたから、あまり気持良いとは思えませんでした。私たちの部隊二千人のうち、百人ぐらいは亡くなったと思います。ほとんどの人がケガをしていました。

**市民の負傷者もやってきて**

**「兵隊さん助けて、水を」と**

一、三時間後でしょうか、広島町の一般の負傷者たちが、私たちの部隊に助けを求めてたくさんやって来ました。「兵隊さん助けて」「水をください」と言って。あの悲しい、哀れな声は全くいもじやありませんし、今でも忘れられません。水道はもう止まっていたから、古井戸から水をくんで子供にも飲ませたりしました。火傷のひどい人は、皮がむけてしまつて、まるでボロのシャツを着ているようでした。それにゴミなんかがたくさんついて、本当に残酷なものでした。飲ませた水だって、そんなにきれいな水じゃありませんが、仕方ありませんでした。



**「すごい威力の爆弾だな」**

それから部隊の仲間の負傷兵を、広島島の南、一里ぐらい離れている宇品船舶練習部に担架で運びました。運ぶ途中、「被害がこんなに遠くまで広くやられて、本当にすごい威力の爆弾だな」と思いました。原爆とわかったのは、三日後ぐらいたと思います。

その晩は宇品にゴロ寝し、けが人だけには毛布を一枚敷いて並べて寝かせました。昼食なんて食べるどころではなかつたし、夜食に携行食の乾パンをその日初めて食べました。コンペイトウが二つくつついた、硬い小さな乾パンで、味なんかありません。水を飲み飲み食べました。翌七日にはまた部隊にもどつて兵舎の後片付けの作業をしました。

八月一五日の終戦の放送は、無線機を通して聞きました。その二、三日ごろから、どうも下士官の様子がおかしく、うわさ話でみんな戦争はやめるんじゃないか、なんて言っていました。部隊が解散になったのは九月二〇日でした。

**姉たちが広島まで迎えに来る**

ところが私の鹿島の生家では、終戦後一ヶ月以上も経つのに、私の消息がつかめず心配して、姉といとこの三人が、私を迎えに広島までやって来ました。交通事情も悪く、切符も買えず、瀬戸内海を経由して苦労して、九月二三日の夕方、広島に着きました。私だつて連絡のしようがありませんでした。そして、四人で広島島の宇品から船で尾道へ。尾道から鹿島までは汽車で帰りました。

**幸い、体は異常なしで**

本当にこんな原爆や戦争中のことなんか、夢のようです。戦友会などでこれまで五回広島を訪ねています。幸い私は爆心地から二キロメートルの地点で被爆していますが、一年ぐらいは体はだるかつた。でも幸いその後、何ら異常はありません。健康で酪農業に従事し、子供は三人、孫七人、曾孫一人になりました。

今だからこそ被爆の話もできずが、昭和二七年に結婚した時も被爆のことはふせていました。それだけ不安も偏見もありました。原爆手帳は雑誌『家の光』で読んで、県に申請しますが却下され、同じく広島島の宇品の軍隊にいた鹿島の鳥崎のNさん(故人)の証言でようやく交付されました。

(※編者注・Nさんは宇品で被爆。八月下旬に麻酔なしで盲腸手術を受け、命からがら鳥崎の自宅に生還されました。)

**日本の原爆製造計画は失敗**

原爆なんて本当にひどいもんです。でも私が鹿島区の真野小学校で代用教員をしていた昭和十八、十九年の元旦の『日日新聞』に、「マツチ箱ぐらいの大きさの武器で大艦隊を撃滅できる弾薬」というような、今考えればと原子爆弾のことだと思ふのですが、そんな記事があったことを覚えていますが。日本でも原爆を研究していたが、製造過程で爆発し失敗した、ということもあつたそうです。国と国がお金の対立で争いや戦争になるのですが、戦争だつて決してやるべきではないと思います。あんな悲惨なことはたくさんです。

○この被爆体験は、1983年5月23日に伺ったお話(1983年発行の被爆体験談集『私も証言する』)に収録)と、今年6月22日訪問時のお話をまとめたものです。○岡さんは今年85歳、お元気で農作業中でしたが、訪問に快く応じてくださいました。○現在、広島比治山は標高70mの展望台のある「比治山公園」になり、宇品の通信隊跡地は6月22日暴走事件が起きた「マツダ宇品工場」になっています。